報　文

音の視覚イメージを用いた音楽表現活動の実践

櫻井　琴音

（佐賀短期大学　幼児保育学科）

（平成20年２月29日受理）

Music Activities Using Visual Images of Sounds

Kotone SAKURAI

(*Department of Early Childhood Education and Care*)

(Accepted February 29, 2008)

Abstract

When a teacher of kindergarten or childcare center wants to use musical instruments in the class and to make their music activity creative, he/she has to get a full understanding of the features of sound produced by the instrument. To help our students, or future teachers, understand it, we let them work on the following two activities:

(1) Drawing on paper of a shape of the image they have on each sound of the instruments such as tambourine, castanet, bell, snare drum, triangle, bass drum and cymbal;

(2) Making a piece of music using the drawn shapes, based on the theme "Scenery with Sound".

These activities helped the students a lot to understand and describe the features of various sounds. In this article we try to evaluate the educational effectiveness of these activities using the reports of the students who took part in them.

Key words : sound　音
visual image　視覚イメージ
musical expression　音楽表現

1．諸　　言

保育現場で活用されているカスタネットやタンブリン等の無音程打楽器群、木琴や鉄琴等の有音程打楽器群、鍵盤ハーモニカやアコーディオン等の旋律楽器群の中で、幼児の体格に合わせて作られた楽器の中に、以前は非常に粗雑な音のものも見受けられていた。しかし、年々、改良が進められたことによって、今日ではかなり良質の音が得られるよう改良が進んでいる。また、子どもたちと係わる保育者のために制作されたＣＤや曲集等の音楽教材も豊富になってきていることから、現在では様々な音源や資料を容易に入手することができるようにもなった。

このような面での子どもを取り巻く音楽環境は、年々、豊かになってきてはいるのだが、その一方で保育現場における音楽活動内容は、保育者のピアノ伴奏に合わせて歌ったり、数種類の楽器を組み合わせて合奏をしたりというような、所謂、従来型の活動が依然として主流を占めており、音楽活動の基礎ともいうべき「聴く活動」や「創造的な音楽活動」については充分に研究・実践が行われているとは言い難い現状である。

発表会において幼児たちは素晴らしい演奏を披露してくれる。しかし、その演奏は保育者の指導のもとに練習を積み重ねてきた結果として出来栄えの良い演奏となっているのであり、そのための練習プロセスにおいては、必ずしも一人ひとりの子どもの自発性や創造性が生かされているとは言い難い実情を耳にすることもある。保育現場における音楽表現活動を個々の子どもの『自発性』や『創造性』という観点から捉えると、大きな問題を含んでいるといえ、場合によっては保育者の音楽観を子どもに押し付けてしまう危険性をもはらんでいる。

以前、筆者は保育現場において、曲のイメージをもとに表現活動を展開していくことを試みた[1・2]。そこでは、一見、稚拙とも思えるような表現の中にも、固定観念に捉われていない幼児期の子どもたちの音に対する豊かなイメージや表現活動上の柔軟な発想が得られたことから、彼らの中には音楽表現としてだけでなく、言語表現、身体表現、造形表現といった多様な表現活動へと幅広く活動を展開させていく力が内包されているということが分かった。[3・4・5]子どもたちが耳をそばだてて音を聴くよう導き、千変万化する音の世界と向き合わせる体験を重ねていくことは、子どもたちの創造性を引き出し、音を介した彼らの表現の世界をより豊かなものへと繋いでいく道筋となると思われる。

我々人間にとって「聴く」ということは、ただ単に音を知覚し認識することではない。「創造的な音楽表現活動」を実践するには、対象となる子どもの発達段階を考慮した適切な係わりが即座に行えるかどうかということに加え、保育者自身が豊かな創造力を身につけているか否かも重要な鍵と成り得る。

そこで筆者は、本学幼児保育学科の学生を対象に、楽器の音を傾聴させることを通して、音と向き合う活動に取り組ませた。今回は、まず音の特性を捉えさせるための手段として、楽器の音に対するイメージを線や図形といった視覚イメージに置き換えて描かせることを課した。さらに、身の回りに存在する『音のある風景』をテーマにした図形楽譜の作成にも取り組ませることによって、日頃、何気なく聞き流してしまいやすい音の世界にも目を向けさせることを試みた。

本稿ではこれらの実践内容と結果を報告し、この取り組みに期待できる教育的成果について検討する。

2．方　　法

1）対象

本学幼児保育学科の平成19年度の1年次生117名

2）場所

本学の音楽室

3）時期

筆者が担当する後期開講の『器楽』の第２回目の授業中に行った。授業はクラス別に展開しているので、平成19年10月９日～10月15日にかけてクラス単位で実施した。

4）使用楽器

保育現場で使われている無音程打楽器群の中から、下記の楽器を選択した。

① タンブリン（TMB-221）
② カスタネット（ZEN-ON）
③ 鈴（YBB321）
④ 小太鼓（SD3465）
⑤ トライアングル（TRG-602）
⑥ 大太鼓（CB-732D）
⑦ シンバル（Zildjian Hand Cymbal 20″）

これらのうち①②③は楽器遊びだけでなく身体表現活動でも頻繁に活用されており、保育現場での使用頻度が高い楽器群に属する。その点において、保育現場の子どもたちにとっては、かなり身近な楽器であるという理由で取り上げることにした。

それに対し④⑤⑥⑦は、上記①～③の楽器と比較すると使用頻度は低くなるものの、いずれも合奏では欠かせない楽器である。また、本学学生に合奏用の編曲に取り組ませると、楽器の組み合わせやリズムの面で最も取扱い方に課題が見られる楽器群であることから、この活動の中で取り上げてみることにした。

5）活動内容

使用する７つの楽器を余韻の有無で分類し、まず余韻のない楽器のタンブリン、カスタネット、鈴、小太鼓の音を順次提示していった。続いて余韻のある楽器のトライアングル、大太鼓、シンバルの音を順次提示した。また、トライアングル、大太鼓、小太鼓は、各楽器専用の撥を使用して鳴らした。

各楽器の音は２回ずつ鳴らし、余韻の長い楽器については余韻が消えるまで必ず傾聴し続けた上で、音のイメージを図形で描くよう指示した。

学生たちが慌てずにイメージを描くことができるようにするために、各楽器を鳴らす音の間隔は充分に確保することを心掛け、一つの楽器のイメージ図形を描き上げたのを確認した後、次の音を提示するよう配慮した。

①　音のイメージ図

各学生には、Ａ３の白用紙１枚、黒の油性マジックペン（ペン先が細いものと太いもの）を配布し、音のイメージを図形で描かせた。各楽器のイメージ図を用紙の中にどのように配置して描いていくのかは、各学生の自由とした。全ての楽器のイメージ図を描き終わったことを確認後に回収し、その場で全員のイメージ図を紹介した。

②　図形楽譜

学生を５名程度のグループに分け、各グループにＡ３サイズの白用紙と黒の油性マジックペン（ペン先が細いものと太いもの）を配布した。図形楽譜のサンプル[6]（図１参照）を提示し、グループごとに話し合わせながら身の回りにある『音のある空間』を題材とした図形楽譜の作成に取り組ませた。

③　アンケー調査の実施

上記の①と②の活動に取り組んだ体験を通しての各自の気づきと感想についての記述を求めた。約20分間の記述時間を与え、授業終了時に回収した。

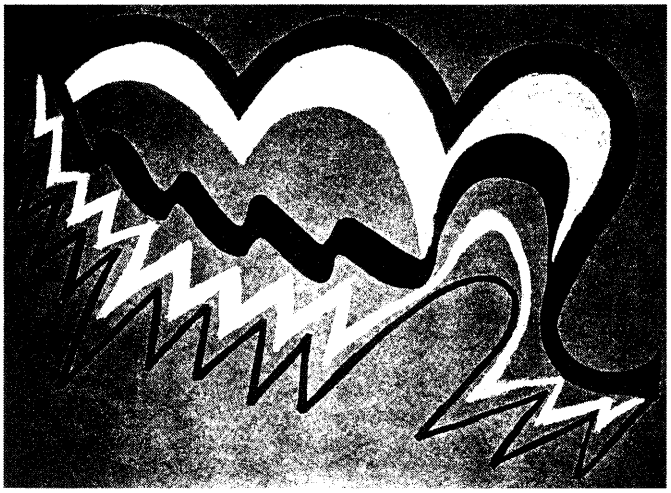

図１　ジェイン・フィリップス

３．実践結果

1）学生が描いた楽器の音のイメージ図

個々の学生に描かせたイメージ図の中から、紙面の都合により、ここでは６名の学生の作品を紹介する。（図２～図７参照）

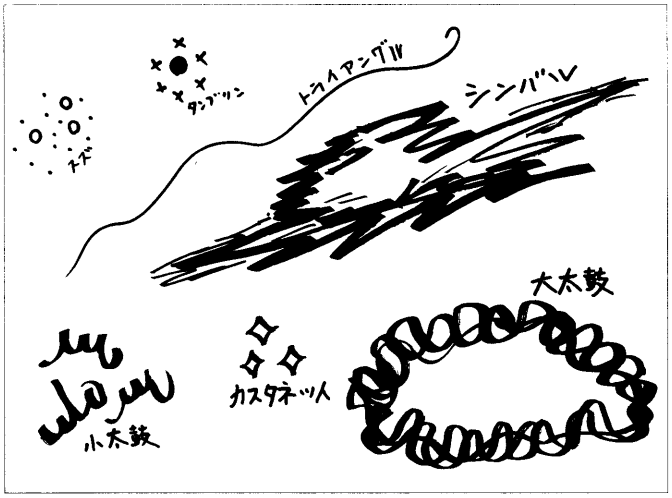

図２

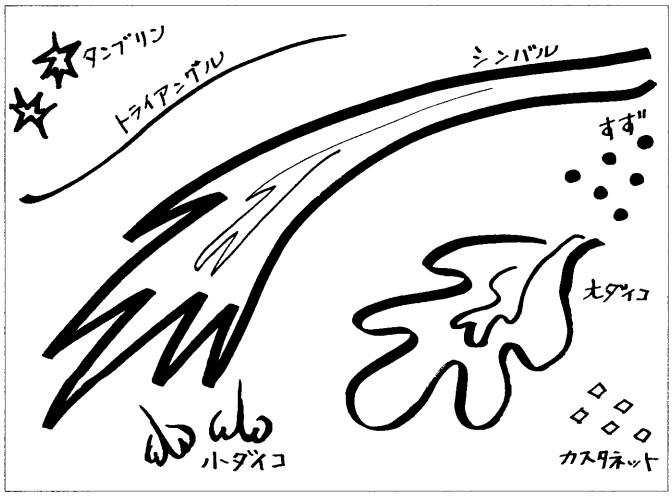

図３

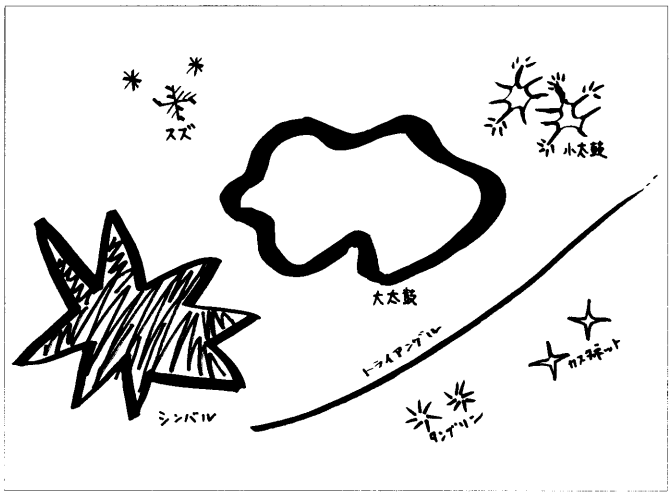

図４

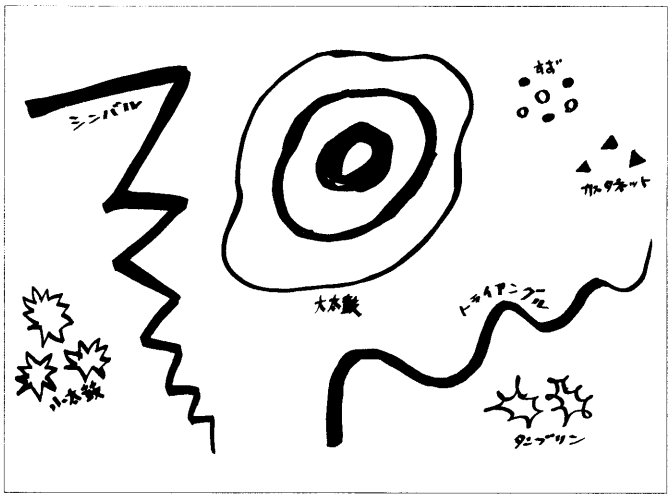

図５

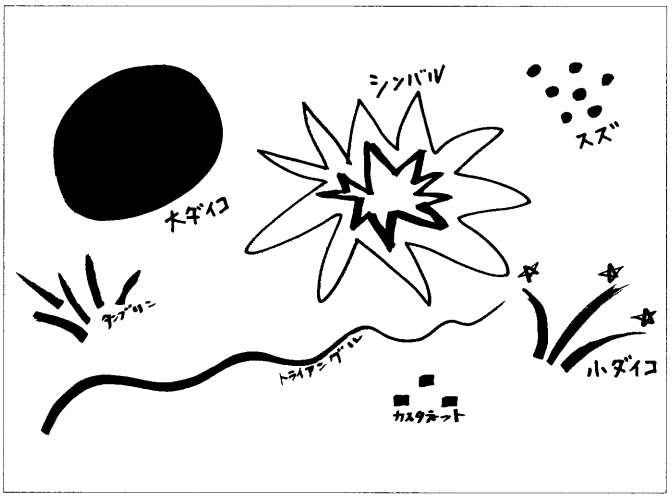

図６

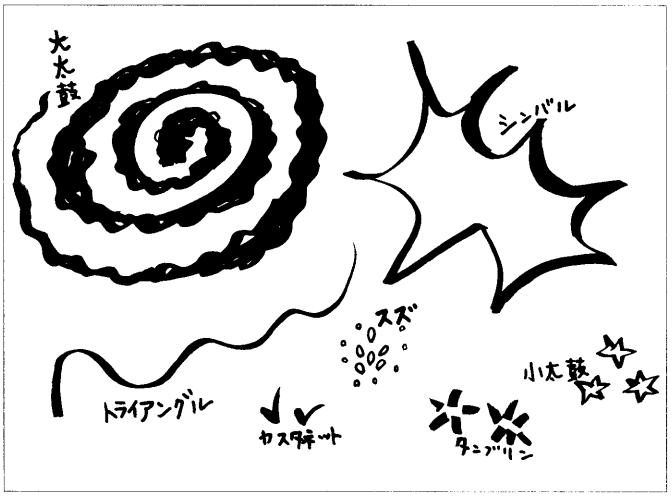

図７

① タンブリン

図形の特徴として、粒の集合体、ヒイラギの葉のような形、放射線状のはじけるような線等が描かれていた。線のかすれ具合から、勢いよく描かれた形跡が認められるものもあった。

② カスタネット

丸や三角、菱形等の小さな粒の集合体が描かれているものが多く、パンと弾けるような図形も描かれていた。

③ 鈴

小さい丸や点の集合体、星形、菱形、雪の結晶のような形が描かれていた。

④ 小太鼓

パンと弾けるような線やタンブリンと類似したヒイラギの葉のような図形が見られた。

⑤ トライアンブル

細くて長い波線、細い直線、波紋のように中心から広がっていくような線が描かれていた。

⑥ 大太鼓

大きい丸を黒く塗りつぶしたもの、太い螺旋状の線、太い線の三重円、もこもこした雲状の図形が描かれていた。いずれの線も肉太に描かれていた。

⑦ シンバル

幾重にも重なった同じ形や線、ぎざぎざの角ばった線、入り組んだ角のある図形、ヒトデのような形などが見られ、いずれも太い線で力強く描かれていた。かすれた線も見られ、勢いよく描かれたことが窺えるものもあった。

2） 図形楽譜の作成

身の回りにある『音のある空間』を題材に、約５名ずつのグループで取り組ませた。自分たちの身の回りにある音のイメージについて話し合わせ、その上でグループごとにテーマを決めて図形楽譜を作らせ、それを演奏させた。その結果、「天気予報」「嵐の夜」「祭り」「学生ホール」「遊園地」「沖縄の海」「動物園」「花火」「駅のホーム」等の作品が完成した。その中から本稿では、「天気予報（図８）」と「嵐の夜（図９）」という２つの作品を紹介する。

図８

図９

3） アンケート調査結果

学生の自由記述については、内容によって下記の①②③の３つに分類し、主なものを一部引用する。

① 音に関する記述

・ このような体験は初めてで、音のイメージがそれぞれ違っていることが分かった。重い音、軽い音、湿り気のある音、乾いた音など。丸い音もあれば、刺のある音もあった。
・ 楽器の音には、明るく感じる音と暗く感じる音があった。
・ タンブリンは軽い感じの音だと思っていたが、よく聴いてみると少し刺のある音だと思った。
・ 余韻がない楽器は、小さな丸や角ばった粒々で表現した。大太鼓、シンバル、トライアングルは余韻が長いので、線で表現した。余韻にも表情の違いがあることを感じた。だから、大太鼓の音からは厚みと弾力性を感じたので、太い渦巻が広がっているように描いた。それに対してシンバルはギザギザの太い線、トライアングルは細くて角のない波線で表現した。
・ 軽い感じの音の中にも、丸っこい音と刺々しい音があることが分かった。
・ トライアングルの音に対しては、弱々しい音というイメージを持っていたが、よく聴いてみると想像以上に長くしっかりと響き続け、芯のある音だと思った。
・ タンブリンと小太鼓は、音の質が似ていると思った。
・ カスタネットのように小さな楽器は小さな音しか出せないと思っていたが、想像していた以上によく響く音だった。

② 図形に関する記述

・ 図形は直感で描いた。予想以上に音のイメージがすんなりと頭に浮かんできたのには、自分でも驚いた。
・ 出来上がったイメージ図を眺めていると、線の太さの具合や図形の形から音の特徴が感じ取られた。
・ 音を線や図形で表現するのは難しいと思った。でも、描いてみると自分がそれぞれの音をどのように感じているのかが分かった。
・ タンブリンと小太鼓は似たような音だと思っていたが、イメージ図で表現してみたら全然違う図形になっていたのは、自分でも意外だった。
・ 出来上がった図を見ると自分がどの楽器の音にインパクトを強く感じていたのか、またその逆にどの音のインパクトが弱かったのかが、イメージ図の形や配置に現われているということに気がついた。
・ 色々な音の図形を描きながら、同時に風景や人の表情等も私の頭の中に浮かんできた。こんな体験は初めてだった。
・ 私の場合、音からすぐに図形が浮かんだのではなく、鈴→雪→白のように、音からまず物が浮かび、次に色が浮かび、最後に図形が浮かんだ。
・ 弾けるように乱れた線、丸みを帯びた歪んだ線など、音によって全部図形の形が違っていた。
・ 音の強さではなく、音から感じる力の強さによって線の太さや図形の大きさが決まった。
・ 音を図形で現してみると、意外なもの同士（タンブリンと小太鼓）が似たような形になることがあるということに気がついた。

③ 感想

・ 楽器の音をこんなにじっくりと聴いたのは初めての経験だった。一つひとつの楽器と向かい合うことができた。
・ やる前は難しそうだと思ったが、実際にやってみると聴いた音が頭の中で図形になっていったので迷わず描くことができた。
・ 静かな中で一つひとつの音を丁寧に聴いたからこそ、音の色やイメージが浮かんできたのだと思う。
・ 音を集中して聴けるような環境を整えることは、音楽活動をする上で、とても大切なことなのだということを痛感した。
・ 注意深く聴いてみると、一つひとつの音色が頭の中でこれまでとは全然違うイメージとなっていた。音に対して新しい発見ができる活動だと思った。
・ いつもは何気なく聴いていた音だったが、耳を澄まして聴くと音にも表情があるということを感じることができた。
・ 音にも思いつく色があるものだということに気がついた。
・ 皆の図形を見比べてみると、一つの楽器の音が様々な図形で描かれていた。楽器それぞれが人に与える印象は、これほどまでに違っているのだということに驚いた。

・　音の余韻は音が消えてからも耳に残っていた。こんな体験は初めてだった。
・　注意深く音を聴きとる前と後とでは、それぞれの楽器の音に対するイメージが違っていた。
・　一つひとつの音をじっくり聴いてみると、合奏をしながら聴いている音とは違うように聞こえた。一つの音をじっくり聴いたことがなかったので、やってみて良かった。
・　聴く前にそれぞれの楽器の音を思い出してみたが、その音と実際に聴いた音の印象が違っていた。
・　楽器の音をこれほど集中して聴いたのは、初めての経験だった。音の不思議さを感じた。
・　イメージを描くことはとても大事なことだと感じた。音によってイメージが変わり、その変化が面白かった。
・　こんなに音を聴くことに集中したのは、初めてのことだった。曲によって、楽器の組み合わせを変えて演奏することの理由が分かった。
・　これまで何気なく音を聞いていたが、今回、改めてじっくり聴いてみると、音にも個性がありそれぞれが全然違った音なのだということが分かった。だから、合奏をする時にはどこでどの楽器を使うのかを考えなければいけないし、その工夫をすることによってきれいな合奏が仕上がるのだと思った。
・　楽器は一つひとつに特徴がある。曲の雰囲気と楽器の音がうまくマッチした時、楽器が生かされているといえるのだと思う。
・　音のイメージを図形で現すことによって、自分がその音をどのように感じているのかが分かった。

4．考　　察

今回、学生たちに対して、音のイメージを図形に置き換え、音の特徴を視覚的に捉えさせることを試みた。ここで使用した楽器は、保育現場で使われている楽器の中でも比較的使用頻度の高い楽器群に属することから、いずれの楽器も学生たちは幼児期の頃に手にした経験を持っている。そういう点では、彼らにとって馴染みのある楽器だといえる。活動後の学生たちからは「楽器の音をこんなにじっくりと聴いたのは初めての経験だった。一つひとつの楽器と向き合うことができた」「楽器の音を集中して聴いたのは初めての経験だった。音の不思議さを感じた」というような、自らの音の聴取体験を振り返る記述が得られた。このことから、学生たちにとって演奏した経験があるということと、その楽器の音を聴き取るという体験とは、必ずしも直結したものではなかった可能性があるということが伺える。

保育現場における楽器活動の中で、子どもたちに音を傾聴させることのできるような活動を実践するには、まず保育者自身が充分に音と向き合い、個々の楽器の音の特徴を感じ取ることを体験しておくことが望まれる。したがって、今回の取り組みは上記のような聴取体験のための有効な方法と成り得る活動であると思われる。

学生の記述には「音の強さではなく、音から感じる力の強さによって線の太さや図形の大きさが決まった」「出来上がったイメージ図を眺めていると、線の太さの具合や図形の形から音の特徴を感じ取ることができた」というような音の特徴に関する記述や、「自分がどの楽器の音に強いインパクトを感じたのか、また、その逆にどの音に対するインパクトが弱かったのかが、イメージ図の形や配置に現われているということに気がついた」といった音と向き合う自分自身に対して目を向けた内容の記述も見られた。自分が描いた視覚イメージを見つめ直すことは、学生たちにとって個々の楽器の音の特徴をより鮮明に捉えるための時間であったと考えられる。

保育者養成校によっては「器楽」という科目名でピアノのレッスンを行っているところもあるが、本学の「器楽」の授業では保育現場で行われている楽器遊びや合奏等の指導を行っている。当然、この授業の中で幼児曲を合奏用に編曲させることにも取り組ませる。「曲によって、楽器の組み合わせを変えて演奏することの理由が分かった」「曲の雰囲気と楽器の音がうまくマッチした時、楽器が生かされているといえるのだと思う」「音にも個性がありそれぞれが全然違った音なのだということが分かった。だから、合奏をする時には、どこでどの楽器を使うのかを考えなければいけないし、その工夫をすることによってきれいな合奏が仕上がるのだと思った」というような編曲に関する記述もあった。この取り組みは「器楽」の授業の第２回目の時に実施したので、学生たちは編曲に関してはまだ学習していない。それにもかかわらず、授業の初期段階で編曲上の留意点に関する気づきが得られたことは、この取り組みの有用性を示唆するものであると思う。

マーセルは著書の中で、「人は単なる技術の習得によって音楽的になるのではなく、音楽とリズムによるデザインとしての音楽を知覚し、想像し、思考し、かつ音楽の実体に感情的に反応し得る力の発達によって音楽的になるのである。・・・音楽教育は、聴覚教育―きき方の教育ともいえるだろう。・・・音楽的成長の本質はひと言で言えば、創造の過程である。そして創造の過程とは、私たちが知覚し、想像し、考え、感じ、行動する道を創り出す過程である」と述べている。[9]保育現場における音楽表現活動が、子どもの発想を生かした「創造的な音楽活動」として、また、マーセルの指摘にあるような「音楽の実体に感情的に反応し得る力」を育成する活動と成り得るためには、子どもたちが音を傾聴し、音の特徴に気づき、工夫しながら表現していくことのできるよ

う、保育環境を整えることが重要な要素であると思う。本研究結果から、この活動は学生たちに対して上記のような実践力を育成していくうえでの一方法として有用であると思われる。

5．おわりに

最後に、今後の課題として次の２点を挙げておきたい。まず第一に、今回の実践では楽器のイメージ図と図形楽譜を描く課題に対して大半の時間を費やした。そのため、図形楽譜を用いて即興で表現する活動に対しては、充分な実践と検討を行うには至らなかった。そこで、今後は図形楽譜から音のイメージを膨らませ、即興で演奏することにも時間をかけて取り組ませることによって、この実践研究をさらに深めていく必要があると思っている。

第二に、一学年の学生を対象にしただけでは、データー量が充分とは言いがたい。そこで、今後、本研究を継続してデーターの蓄積を図り、より豊富なデーターをもとにして詳細な検討を行う必要があると考えている。

＜参考文献＞

1．菊本哲也，他：リズムにのって（幼児の身体表現），すずき出版，1980.
2．櫻井琴音，他：新しい表現を取り入れた保育者養成のためのピアノテキスト，カワイ出版，1992.
3．櫻井琴音，米倉慶子：幼児の保湯現活動の展開（身体表現教材を用いて），日本保育学会第46回大会研究論文集，1993.
4．櫻井琴音，米倉慶子：イメージより展開する幼児の表現活動（身体表現教材を用いて），全国大学音楽教育学会研究紀要第５号，1994.
5．櫻井琴音：幼児曲より展開する幼児の表現活動，日本保育学会第48回大会研究論文集，1995.
6．ジェームス・Ｌ・マーセル：音楽的成長のための教育，美田節子訳，音楽之友社，1971.
7．ジョン・ペインター，ピーター・アストン共著，音楽の語るもの，音楽之友社，1982.
8．松本恒敏，山本文茂：この音でいいのかな，音楽之友社，1985.
9．若尾裕：モア・ザン・ミュージック，勁草書房，1990.
10．Ｒ．マリー・シェイファー：サウンド・エデュケーション，鳥越けい子他訳，春秋社，1992.
11．高橋一行：音と視覚イメージの関連について，全国大学音楽教育学会研究紀要，第12号，2001.